



埼玉県のマスコット コバトン

ライプ・レター
Lib. Letter

2014 Summer [5～8月]季刊

平成26年5月24日 通巻 第36号

編集・発行 埼玉県立熊谷図書館

<https://www.lib.pref.saitama.jp/> Tel 048-523-6291

地獄と極楽

—往生要集からみる死後の世界—

開催期間 : 平成26年5月24日(土)～8月24日(日)

場 所 : 埼玉県立熊谷図書館2階ロビー

死後の世界という、興味の尽きないテーマの一つだと思いますが、その中でも仏教の考え方に基づいた死後の世界である「地獄と極楽」は、私たちにとって非常になじみ深いものだと思います。

一方で、「地獄」や「極楽」がどんな場所なのか、きちんと説明できる人というのは案外少ないのではないのでしょうか？

今回の展示では、なじみ深いけど、実は知らない地獄と極楽を、「往生要集(おうじょうようしゅう)」やこれに関連する資料を通じてご案内します。



1 地獄と極楽

地獄と極楽。いけるのならば死後はぜひ、極楽に行きたい、と思っている人は多いと思います。そして、行きたくはないけれど、地獄がどんな場所なのかを知っておきたい、と思っている方もまた多いと思います。

このテーマでは、色々なイメージのある地獄と極楽のなかでも、往生要集に書かれている地獄と極楽がどのような場所であるのかについて記述がある資料を紹介しています。

まず、地獄と極楽のどちらに行くことができるのかですが、往生要集を読む限りでは、現代社会で生活している人々のなかで、地獄に落ちない人はほとんどいないと思われま。それはなぜかという、死後、地獄に落ちないための条件というのが、非常に厳しいからなのです。条件の主なものとしては、

小さな虫を含め、「生物を殺したことはない」(殺生)、形のないものを含め、「人のものを盗んだことはない」(偷盗)、いかにその人を愛していようとも、「淫らな行為をした

ことがない」(邪淫)、それが優しさだとしても、「嘘をついたことはない」(妄語)、法律で許されているとしても、「酒を飲んだことはない」(飲酒)等が、あげられていて、これらの条件に対し、嘘偽りなく、「それらの条件すべてに当てはまるので、極楽にいけます」といえる人は、そうそういないでしょう。

このようなわけで、ほぼ全ての人が、地獄に落ちてしまうため、さきに地獄について紹介します。一言に、地獄といっても実は、複雑な作りをしています。

まず、地獄は大きく八つの階層に分かれています。これを八大(八熱)地獄といい、それぞれの階層には個別に名前があります。上から順に「等活(とうかつ)地獄」「黒縄(こくじょう)地獄」「衆合(しゅうごう)地獄」「叫喚(きょうかん)地獄」「大叫喚(だいきょうかん)地獄」「焦熱(しょうねつ)地獄(炎熱地獄)」「大焦熱(だいしょうねつ)地獄(大炎熱地獄)」「阿鼻(あび)地獄(無間地獄)」といい、生前の罪が重いほど下層の地獄におちていくこととなります。

八大地獄の対応表		
地獄名	罪状	地獄の内容
等活	殺生	果てしなく傷つけあう世界
黒縄	殺生・盗み	熱鉄の上で、黒縄のしるしにしたがって切られる
衆合	邪淫	赤熱のくちばしの鳥や剣の葉でできた林で苦を受ける
叫喚	殺生・盗み・邪淫・飲酒	釜茹でにされたりする
大叫喚	上記4つと妄語	上の10倍の苦しみを受け、舌を抜かれる
焦熱	上記5つと邪見(悪い考え)	もっとも熱い苦
大焦熱	上記6つと更に、尼を犯した罪	上の10倍の苦
阿鼻	父母や仏を傷つけたりする等の救いようのない罪	救いようのない極苦

参考：『往生要集 地獄のすがた・念仏の系譜 NHKライブラリー 84』
(石上善応／著 東京 日本放送出版協会 1998)

さらに「往生要集」によると、八大地獄は四方に門があり、門の外には八大地獄のそれぞれに付随した16の小地獄が存在し、生前の罪の内容によっては、小地獄に振り分けられて、そこで苦しめられることもあるのです。

たとえば、「等活地獄」は生前に殺生を行ったものが落ちる地獄ですが、その殺生の内容が、生き物を殺して煮て食べた場合は、「瓮熱処(おうねつしょ)」という小地獄に振り分けられ、鉄でできた瓮(もたい)(水や酒を入れる器)に入れられて、今度は自分が豆のように煎り、煮られてしまうことになるのです。

小地獄はほかにも、様々な罪の内容によって振り分けられますが、中には現代ではもう落ちる人はいないのではないかと、というような罪状の地獄もあり、そのような小地獄を探してみるのも面白いです。

さて、このように地獄について述べてきましたが、実は地獄は六道(1. 地獄 2. 餓鬼 3. 畜生 4. 阿修羅 5. 人 6. 天)のうちの一つであり、この6つの世界を往生要集では迷いの世界としています。そして往生要集では、その迷いの世界とは別に、極楽浄土の世界があるとされています。

では、極楽とはどのような場所なのでしょう？「往生要集」の場合には、阿弥陀如来が主である、西方の極楽浄土を想定しており、その様子について説明があります。

極楽では、自分の姿は紫金（しこん）に輝き、周りには、仏を讃える人で溢れていて、はるかに阿弥陀仏を拝し、観音と勢至から、ねぎらいの言葉をかけられ、かつてない喜びにひたることができます。そして、極楽浄土に往生した人は、神通力を得て、心のま

往生要集にみる欣求浄土（ごんぐじょうど）

（極楽に生まれることを願い求める）の10の楽しみ

- | | |
|---|---|
| 1. 聖衆来迎（しゅじょうらいこう）の楽
仏や菩薩が迎えに来る | 6. 引接結縁（いんじょうけちえん）の楽
縁のある人々を極楽に連れて来られる |
| 2. 蓮華初開（れんげしょかい）の楽
蓮華の花が初めて開く | 7. 聖衆俱会（しゅじょうくえ）の楽
常に仏や菩薩という聖者といられる |
| 3. 身相神通（しんそうじんずう）の楽
種々の神通力を得る | 8. 見仏聞法（けんぶつもんぼう）の楽
仏に会って教えを聞ける |
| 4. 五妙境界（ごみょうきょうがい）の楽
すべての感覚の対象がすばらしい | 9. 随心供仏（ずいしんくぶつ）の楽
思いのままに仏に供養できる |
| 5. 快樂無退（けらくむたい）の楽
楽しさがなくなることがない | 10. 増進仏道（ぞうしんぶつどう）の楽
悟りの道へ進んでゆける。 |

参考：『往生要集 古典を読む 5』

（中村元／著 東京 岩波書店 1983）

まにあらゆる世界の様子を知ることができ、極楽の美しい世界を五官全てで楽しむことができます。また、六道世界と異なり、悩み苦しみとは、永遠に訣別することができるようになり、楽しさがなくなることがありません。さらに、浄土の菩薩や阿弥陀仏から直接教えを聞き、仏の道を押し進めることが可能となっています。

このように具体的に極楽の様子を描写されると、私たちの極楽のイメージに当てはまるような非常に魅力的な場所であるように思います。

このコーナーの展示資料

【図書資料】

- 『地獄の事典（世界の驚異シリーズ 3）』（国際情報社 1978）[R181.4/ジ/]
『地獄の世界』（坂本要／編 溪水社 1990）[181/Sa32/]
『地獄の思想（中公新書 134）』（梅原猛／著 中央公論社 1982）[181/ジ/]
『地獄めぐり（ちくま新書 246）』（川村邦光／著 筑摩書房 2000）[181.4/シコ/]
『地獄の話（講談社学術文庫 561）』（山辺習学／〔著〕 講談社 1981）[B181.4/ジ/]
『日本人と地獄』（石田瑞麿／著 春秋社 1998）[181.4/ニホ/]

- 『地獄極楽見物』(真繼雲山／著 日本仏教新聞社 1934) [184/シコ/]
- 『図説日本仏教の世界 5』(集英社 1988) [182.1/スベ/]
- 『日本の仏教を知る事典』(奈良康明／編著 東京書籍 2005) [182.1/ニホ/]
- 『仏教民俗学 (講談社学術文庫 1085)』
(山折哲雄／〔著〕 講談社 1993) [B180.2/グベ/]
- 『死後の世界』(田中純男／編 東洋書林 2000) [162.2/シコ/]
- 『地獄と浄土 (春秋選書)』(山折哲雄／著 春秋社 1982) [182.1/ジベ/]
- 『地獄と極楽』(菊村紀彦／著 雄山閣出版 1995) [180.4/シコ/]
- 『日本人の地獄と極楽』(五来重／著 人文書院 1991) [181.4/ゴベ/]
- 『地獄と人間』(西郷信綱／〔ほか〕 著 朝日新聞社 1976) [180.2/ジベ/]
- 『極楽浄土への誘い (日本人の行動と思想 35)』
(石田瑞麿／著 評論社 1976) [188.6/イ/]
- 『極楽の観光案内』(西村公朝／著 毎日新聞社 1993) [181.8/ゴベ/]
- 『極楽の世界』(坂本要／編 北辰堂 1997) [181.4/コク/]
- 『地獄と極楽 (歴史文化ライブラリー 51)』
(速水侑／著 吉川弘文館 1998) [188.63/シコ/]
- 『阿弥陀仏と極楽浄土の物語』(大角修／著 勉誠出版 2013) [183.5/アミ/]
- 『浄土三部経 上 (ワイド版岩波文庫 73)』
(中村元／〔ほか〕 訳注 岩波書店 1991) [183.5/ジベ/]
- 『浄土三部経 下 (ワイド版岩波文庫 74)』
(中村元／〔ほか〕 訳注 岩波書店 1991) [183.5/ジベ/]
- 『日本の仏教 5』(筑摩書房 1970) [180.2/ニホ/]
- 『観経曼陀羅図説』(後藤真雄, 吉田哲雄／共著 東洋文化出版 1980) [186.8/ゴベ/]
- 『当麻曼陀羅絵説き』(鷲津清静／著 白馬社 1987) [186/W44/]
- 『熊野観心十界曼荼羅』(小栗栖健治／著 岩田書院 2011) [D186.81/クマ/]
- 『往生要集 1 (東洋文庫 8)』(源信／〔著〕 平凡社 1963) [188.6/ゲベ/]
- 『往生要集 (NHKライブラリー 84)』
(石上善応／著 日本放送出版協会 1998) [188.63/オウ/]
- 『図説地獄絵をよむ ふくろうの本』
(澁澤龍彦／著 宮次男／著 河出書房新社 1999) [721.024/セ/] 【久喜図書館所蔵】

【雑誌資料】

- 『ダ・ヴィンチ 2012年3月』(20120306、19-3、00215)
- 『宝島. 別冊 1907 (2012年10月21日)』(20121021、1907)
- 『大法輪 1985年5月号』(19850501、52-5)

2 往生要集

日本での地獄と極楽のイメージの基礎となっている、「往生要集」。しかし、その内容もまた、地獄と極楽の様子と同じく、ご存知のない方も多いのではないのでしょうか？このテーマでは、「往生要集」とその著者である「源信」に関連のある資料について紹介します。

まず、「往生要集」ですが、これは平安時代に、比叡山中、横川(よかわ)の恵心院に

隠遁していた源信が浄土教の観点より、様々な経典や論書などから、極楽往生に関する文章を集めた仏教書です。構成は、

『源信 往生要集 原典日本仏教の思想 4』（源信／〔著〕 石田瑞麿／校注 岩波書店 1991.2）のp10より、

「惣べて十門あり。分ちて、三卷となす。一に厭離穢土、二には欣求浄土、三には極楽の証拠、四には正修念仏、五には助念の方法、六には別時念仏、七には念仏の利益、八には念仏の証拠、九には往生の諸業、十には問答料簡なり。」となっています。このうちの地獄の様子、および二の極楽の様子が有名ですが、仏教書らしく、念仏についても数多く言及されています。引用している資料としては、「正法念処経」「俱舍論」「大智度論」「大乘理趣六波羅蜜多経」「摩訶止観」「大般涅槃経」「浄土論」など他にも数多くの資料があげられます。

つぎに、それを記した源信ですが、天慶5年（942年）、大和国（現在の奈良県）に生まれています。信仰心の篤い母親の影響により若くから仏教を学び、天暦10年（956年）、15歳のころには横川に上り出家したといわれています。そして、天延2年（974年）に季御読経（きのみどきょう）にて名声を博します。そのときに、受け賜った褒美の品を、

故郷にいる母に送り、名声を得たことを報告するのですが、母親はその報告に対し、一喝し、世俗の名声に傾くことを戒め、更なる精進をするようにと、気丈にも突き放すのです。このことによって、目の覚めた源信は、山籠りを続け、念仏三昧の道を選びます。

その後、寛和元年（985年）3月、『往生要集』を書き上げ、寛弘元年（1004年）には、権少僧都となるも、母の諫言のとおり、名誉を好まず、わずか一年で辞退します。そして、寛仁元年（1017年）、76歳にて示寂。臨終にあたって阿弥陀如来像の手に結びつけた糸を手にして、合掌しながら入滅したと伝えられています。

母親が源信を諫めた手紙の内容

「この母があなたを法師にした本意は、貴所の御八講などに入入りさせるためではありません。あなたはたった一人の男の子です。それなのに元服もさせずに出家させたのは、学問して身の才をよくし、多武峰の増賀聖人のように貴い人になって、この私の後生を救ってもらいたいからです。だから、世俗的な名声など望むところではありません。この世にあるうちに聖人となったあなたを見届けて安らかに死にたいものです。」とこのように、手紙を送るのです。源信の母親もまた立派な人であることが分かります。

（引用：『源信 往生極楽の教行は濁世末代の目足

ミネルヴァ日本評伝選』（小原仁／著 ミネルヴァ書房 2006.3）p88）

源信の著作といえば、再三出ている『往生要集』が有名ですが、他にも、『一乗要決』『阿弥陀経略記』『横川法語』（『念仏法語』）などがあり、このテーマではそれらが所収されている資料も展示しています。

このコーナーの展示資料

【図書資料】

『大日本仏教全書 第31冊』（仏書刊行会／編纂 名著普及会 1978）[180.8/㌸/]

『往生要集の文化史的研究』（藤井智海／著 平楽寺書店 1978）[188.6/㌸]

『日本仏教思想研究 第5巻』(石田瑞麿／著 法蔵館 1987) [180.2/I72/]
 『日本思想大系 6』(家永三郎／〔ほか〕編集 岩波書店 1970) [121/-/]
 『一乗要決 (仏典講座 33)』(大久保良順／著 大蔵出版 1990) [183.3/I/]
 『大日本仏教全書 第13巻』
 (鈴木学術財団／編 鈴木学術財団 講談社(発売) 1970) [180.8/タ/]
 『仏教教育思想 第1 (日本教育思想大系 17)』
 (日本図書センター 1980) [181/ブ/]
 『日本名僧論集 第4巻』(吉川弘文館 1983) [180.2/N71/]
 『浄土真宗聖典 七祖篇』
 (浄土真宗聖典編纂委員会／編纂 本願寺出版社 1992) [188.73/シヨ/]
 『源信 (ミネルヴァ日本評伝選)』
 (小原仁／著 ミネルヴァ書房 2006) [188.42/ケン/]
 『日本の名著 4』(伊藤整／〔ほか〕編集 中央公論社 1983) [081/-/]
 『往生要集 (古典を読む 5)』(中村元／著 岩波書店 1983) [188.6/材/]
 『源信 (原典日本仏教の思想 4)』(源信／〔著〕 岩波書店 1991) [188.63/ケン/]
 『往生要集』(源信／著 花山勝友／訳 徳間書店 1972) [188.6/ケ/]
 『法然全集 第1巻』(法然／〔原著〕 春秋社 1989) [188.6/G34/]
 『往生要集研究』(往生要集研究会／編 永田文昌堂 1987) [188.6/材/]
 『最明寺本往生要集 索引篇』(〔源信〕／〔著〕 汲古書院 2003) [R188.63/サ/]
 『往生要集 訳文篇』(〔源信〕／著 汲古書院 1992) [188.6/G34/]
 『往生要集 影印篇』(〔源信〕／著 汲古書院 1988) [188.6/G34/]

3 様々な死後の世界

ここまで、「往生要集」からみた、死後の世界を中心に紹介してきましたが、それ以外にも死後の世界は考え方によって、無数に存在しており、地獄と極楽以外の死後の世界について、いくつかこのテーマで紹介します。

まず、古代日本の場合、死後は「黄泉」にいくと考えられていました。しかし、あの世は「けがれ」の場であり、タブー扱いをされていました。このため、黄泉の概念と善悪を結びつけて考えることもせず、死後はただそこに行くだけのものでした。そして、仏教が日本に流入するにつれて、現在の地獄と極楽のイメージが形作られていくようになったのです。

次に、キリスト教の考え方において死後の世界というのは、天国(heaven)、地獄(hell)、そして煉獄(purgatory)のどれかにいくと考えられています。天国は神や天使がいて、清浄とされる、天上の理想の世界、地獄は死後の刑罰の場所、靈魂が神の怒りに服する場所としています。そして、煉獄ですが、この場所は、天国にはいけないが、地獄に落ちるほどでもなかった死者が清めを受ける場所として存在しています。なお、ダンテの「神曲」はこれらキリスト教の死後の世界についての様子を描いている作品です。

最後に、古代エジプトの死後の世界についてもお紹介します。古代エジプト人にとっ

て、死とは新たな人生の始まりでした。ただ、その新たな人生というのは現世への蘇りではなく、死者の楽園での新たな人生が始まるということなのです。古代エジプトでは死んでしまうと、まず、死者たちは自らの心臓と真実の羽根を天秤にかける審判を受けます。この際に、秤のつりあった者だけが、死者の楽園で生きることを許され、それ以外の場合には、アメミットという怪物に心臓を食べられてしまいその死者は消滅してしまうのです。

このコーナーの展示資料

【図書資料】

- 『講座日本の神話 3 天地開闢と国生み神話の構造』
（『講座日本の神話』編集部／編 有精堂出版 1976）[162.1/コ]
- 『黄泉国（よみのくに）の成立』（土生田純之／著 学生社 1998）[210.32/ヨミ]
- 『地獄遊記』（済公活仏／著 中国嵩山少林寺 1994）[147/シコ]
- 『地獄十殿閻王』（済公活仏／著 中国嵩山少林寺 1994）[147/シコ]
- 『エジプトの死者の書』（石上玄一郎／著 人文書院 1980）[163.8/エ]
- 『地獄の辞典』（コラン・ド・プランシー／著 講談社 1990）[147/ダ]
- 『土曜学校講義 5』
（矢内原忠雄／〔著〕 矢内原伊作，藤田若雄／編集 みすず書房 1969）[080/ヤ]
- 『土曜学校講義 6』
（矢内原忠雄／〔著〕 矢内原伊作，藤田若雄／編集 みすず書房 1969）[080/ヤ]
- 『土曜学校講義 7』
（矢内原忠雄／〔著〕 矢内原伊作，藤田若雄／編集 みすず書房 1970）[080/ヤ]
- 『煉獄の誕生（叢書・ユニベルシタス 236）』
（ジャック・ル・ゴッフ／著 法政大学出版局 1988）[191.6/ル]
- 『イスラームの天国（イスラーム信仰叢書 2）』
（イブン・カイム・アルジャウズィーヤ／原著 国書刊行会 2010）[167.1/イス]
- 『天界と地獄』（イマヌエル・スエデンボルグ／著 静思社 1979）[198.5/テ]
- 『死後の世界（講談社現代新書 1115）』
（岡田明憲／著 講談社 1992）[161/シ]
- 『天国と地獄（Steiner books）』
（ルドルフ・シュタイナー／著 風涛社 2010）[169.34/テシ]
- 『天国の歴史』（コリーン・マクダネル／著 大修館書店 1993）[191.6/テ]
- 『須弥山と極楽（講談社現代新書 330）』
（定方晟／著 講談社 1973）[181.4/シ]
- 『ゾロアスターの神秘思想（講談社現代新書 888）』
（岡田明憲／著 講談社 1988）[168.9/ダ]

4 目で見る地獄と極楽

地獄と極楽を目で見るというのはどういうことか、と思う方も多いと思いますが、地獄や極楽の様子絵というのは古くから多く残されていて、一般的に「地獄絵」や、「曼荼羅」といわれています。このテーマでは、それらの資料から地獄と極楽の様子をご紹介します。



(引用：『国宝六道絵』

(泉武夫／編・著 加須屋誠／編・著 中央公論美術出版 2007) p21)

上の絵は黒縄地獄の様子です。罪人が今まさに黒縄で線を引かれるシーンです。

このコーナーの展示資料

【図書資料】

『国宝六道絵』

(泉武夫／編著 加須屋誠／編著 中央公論美術出版 2007) [DD721/コウ]

【久喜図書館所蔵】

『日本絵巻大成 7 餓鬼草紙』

(小松茂美／編集 中央公論社 1977) [D721.2/=] 【久喜図書館所蔵】

『日本絵巻大成 24 当麻曼荼羅縁起』

(小松茂美／編集 中央公論社 1979) [D721.2/=] 【久喜図書館所蔵】

【雑誌資料】

『太陽. 別冊 65946 (31)』(19880720、65946-31)

『太陽. 別冊 65958 (69) (2013年7月25日)』

(20130725、65958-69)



今回紹介した資料以外にも、県立図書館では地獄や極楽、また、そのほかの死後の世界に関連する資料を所蔵しています。お探しの資料がございましたら、お気軽にお問い合わせください。